

誰のための広場か？ ——みやこのイメージを巡るトラファルガー広場の戦い

野口 祐子

序

ロンドンを観光で訪れる人は、きっと一度はトラファルガー広場に足を踏み入れ、そして暫しそこに佇むだろう。現在のトラファルガー広場は、いつも多くの観光客が憩う名所として有名である。広場の南側に聳えるネルソン記念柱の四隅から周囲を睥睨するライオン像の上には、いつも大勢の、おそらく他国からロンドンを訪れた若者たちが、その背に乗ったりしてカメラに収まっている。広場を訪れる私たちは、この広場がずっとこのような観光スポットであったように思う。そして広場に配置された噴水も階段も点在する銅像も、ずっと昔からそこに在るべくして在ったように思いがちだ。ここはロンドンの伝統的な場所であり、それゆえ観光名所なのだ、と得心している。だが古くから現在同様の姿で存在したように思い込んでいる場所、現在の形が完成形で、これからもずっと同じ形で残るのだらうと思いついていて、実はその場所独自の変化を遂げてきたのであり、これからもその形を変えていくことによって場所の意味を変化させていく可能性があるのだ。石造りの一見したところ変化しそうなトラファルガー広場を、その典型的な例として考察の対象としたい。

『ロンドン事典』の「トラファルガー・スクエア」の項には「たぶん、外人観光客に最も知られた広場のひとつで、大晦日の越年の行事は名物だが、集まってくる人々に生粋のロンドンっ子は少ない。ロンドンで最も騒がしく、かつたぶん最も非イギリス的な広場のひとつであろう」(蛭川他, 792)という説明がある。おそらくこれに異を唱える人は少ないだろう。この記述にある「最も非イギリス的な広場のひとつ」と判断する根拠については、「広場全体の性格は、フランスで典型的に発達した記念碑的公共広場に近いが、建築学的な統一性や偉観に乏しく、他のスクエアに見られる緑地としての雰囲気や居心地の良さもない。この広場に住人として最大の数を占めているのは、ハトであるが、2000年から広場でのエサの販売許可制が廃止された」とある(蛭川他, 793)。観光客に人気の広場に対して、なかなか辛口のコメントであるが、イギリスの知識人階級の多くが見せるちょっと皮肉な見方を反映していると思われる。

確かに観光客に人気の場所であるということは、人でごった返して静かにくつろげないし、口

ンドンっ子にはダサくて行く気がしないかもしれない。やたらと銅像が建っていて威圧的な、帝国主義的なイメージが強い場所だ、という抵抗感と気恥ずかしさから足が遠のいた人も多いだろう。しかし政府とロンドン自治体による21世紀を迎えるミレニアム事業の一環として、トラファルガー広場の改造が行われ、その結果として今日の広場は、より親しみやすい場所になったと評価されている (Hood, 127)。

ロンドンには、ローマを初めとするヨーロッパ大陸の首都が備える威容が欠けているという認識が17世紀以来、グランド・ツアーで大陸の主要都市に滞在した貴族や大陸に留学した建築家を中心に広まった。ごみごみした街路を広げ、スラム街を一掃し、威厳ある広場を造りたいという欲求が高まっていった。この機運が19世紀初期のナポレオン戦争の勝利を機に、やっと部分的に実現しはじめた。

植民地獲得や軍事面以外にもフランスと絶えず競争していたイギリスは、国家の威容を国内外に向けて印象づけるために、ロンドンの改造に取り組んだ。「フランスで典型的に発達した記念碑的公共広場」の代表例はパリのヴァンドーム広場だろう。広場の周囲を均整のとれたバロック式の建物が囲み、その中心にはローマ皇帝の姿でローマの方向を向いてナポレオン像が建っている。このようなパリの広場にならって構想されたのが、トラファルガー広場だった。

パリのヴァンドーム広場が「建築学的な統一性や偉観」を獲得して見た目に美しいのは確かであり、トラファルガー広場がそれに比べて地味で統一感に欠けるのもまた確かだ。しかしヴァンドーム広場が、その高級感で人を寄せ付けず、富裕層以外の人々は見ても賛嘆する場所であるのに対して、トラファルガー広場は、人々が楽しげにたむろする場所としての機能を果たしていると言える。たとえその人々の多くが外国人であったとしても、である。

ここに、トラファルガー広場は誰のための広場か、という問いが浮かび上がる。この小論では、ロンドンのイメージ構築とその変化を理解するための一助として、トラファルガー広場のイメージを巡る、まず現在の論争に触れ、そこからさかのぼって、広場がもともと抱えていた首都のイメージ構築の役割にまつわる諸問題を考察する。「トラファルガーの戦い」とは1805年、ネルソン率いるイギリス艦隊が、フランス・スペイン連合艦隊をジブラルタル海峡のトラファルガー岬沖で破った戦いを指す。その戦勝にちなんで名付けられた広場では、建設当初からイメージをめぐる戦いが繰り広げられた。広場の形、ネルソン記念柱の形、市民の大規模集会を阻止するための案、銅像の建立をめぐる攻防など、帝国の象徴でありロンドンの中心であるトラファルガー広場は、どっしり構えた姿とは裏腹に揺れ動いてきたのである。

1 広場の改造が創出するみやこのイメージの変容

2003年7月2日、約1年間の工事を経てよみがえったトラファルガー広場の再開を記念するスピーチで、ロンドンのケン・リヴィングストン市長(当時)は、このプロジェクトについて、次のように語った。

トラファルガー広場は世界的に有名な広場の一つです。祝祭と抗議の場としての歴史に富んだ場所であり、1945年のヨーロッパ戦勝記念日から2001年のネルソン・マンデラ氏を迎えて開催した南アフリカ解放記念日コンサートまで多くの思い出深いイベントの場所となってきました。ロンドンを象徴する建物に囲まれたこの広場は、それ自体がランド・マーク的存在です。しかしこの場所は長年のあいだ、常に交通渋滞し大気汚染で息の詰まる、ちょっと美化を施した環状交差点にすぎませんでした。この広場の北側を遊歩道化して広場を改装することによって、毎年ここを訪れる何百万人という人々により素晴らしい経験をしてもらえるようにした我々の事業を誇りに思います。(Hood,127)

たかが広場の北側に通っていた道路を封鎖しただけのことと言ってしまうまでもありますが、これが19世紀の広場建設以来なし得なかった英断であり、広場の性格を変えることになったからには、リヴィングストン市長の弁も、あながち大げさとも言えない。

では広場の性格は、どう変わったのか？それを端的に表すのが、このプロジェクトに冠された名称だ。“World Squares For All: Trafalgar Square and its Environs”（全ての人のための広場：トラファルガー広場とその周辺整備事業）は2004年の“Building in an Historic Context”（歴史的環境における建造物）に対する英国建築家賞¹⁾を受賞した(Hood, 127)。「全ての人のための広場」という名称は当たり前のように聞こえるが、この広場を巡る歴史的経緯を考える時、この名称には深い意味が込められていることが分かる。

1-(1) 人に優しい広場

「全ての人のための広場」という名称が指す第一に明らかな変化は、以前は他の所よりは飾り立てた「Roundabout」（環状交差点）であった、すなわちロンドン中心部にあって車の速やかな移動が優先された空間だったものが、歩行者のための空間となった点である。信号機で車の流れを途絶えさせることのないラウンドアバウトは、イギリスに普及した交差点の形だが、これは道を渡る歩行者に優しい交通整理のしかたとは言えない。ミレニアム事業の一環として行われたトラファルガー広場の改造で、“Roundabout”の島と化していた広場を北側のナショナル・ギャラリーと一体化した。ラウンドアバウトではなくなったために車の流れは滞るが、ロンドンはこの事業と軌を一にして、市中心部への車の進入を規制する方策を取っているため、車に不便となる変更も実現できたのだ。

また2001年の南アフリカ解放記念日コンサート以後も、広場は市主導の様々な家族連れで参加できるイベント会場として利用されている。今回の改造ではエレベーターも設置されて、広場とナショナル・ギャラリーへのアクセスも容易になった。

すなわち「全ての人のための広場」とは、歩行者優先の、子供にも障害者にも利用しやすい、人に優しい広場という意味と取れる。

1-(2) 多文化共生社会ロンドンの顔

リヴィングストン市長はぶっさらぼうなまでに率直な物言いを好んだこともあって、彼の発言は物議を醸すことが多かったが、彼がインタビューでトラファルガー広場について語った一言も、マスメディアで大いに取り上げられた。広場には南側に聳えるネルソン記念柱【写真1】の他に、銅像を建てる台座が4つ設置してあり、そのうちの一つは長年空いたままになっていた。この台座については第4節で取り上げることにする。他の3つの台座には、広場の建設当時の国王だったジョージ4世（摂政1811-20、国王在位1820-30）の騎馬像と、ネイピアとハヴェロックという軍人の像【写真2, 3】が載っている。このふたつの像についてリヴィングストン市長は次のように語った。

我々の首都の主要な広場にある台座に載っている像は、一般市民にもすぐに誰か分かる人物の像であるべきだと思います。ふたりの将軍が誰か、彼らが何をした人か、私には皆目見当が付きません。[中略] トラファルガー広場を訪れる一万人のうち、一人としてこのふたりの将軍の人生を知っている人はいないでしょう。もうそんな銅像は移動させて、普通のロンドンっ子が知っている人の像を載せることを考えるべき時だと思いますよ。(Levenson, 219)

ロンドンの広場に大理石やブロンズの人物像はつきものである。誰の像か気にかける人は少ない。だから顕彰されている人物がたとえ19世紀の植民地で抵抗する現地の人々を抑圧した軍人であっても、広場の飾りと見なせばよいという考え方もあるだろう。野外彫刻の一つとして眺めたり無視したりすることもできる。あるいは像自体を、それが建てられた時代の精神を雄弁に物語る歴史の証人として扱うこともできる。つまりどんな人物が英雄視され、銅像となったのか。どんな人たちが像を建てたのか。像はどんな姿を取っているか。なぜ像はその場所に建てられたのか。その像がそこに建つことによって、その場所にどんな意味が生じたのか。これらを検証することによって、ロンドンのイメージを浮かび上がらせることができるだろう。リヴィングストン市長は第三の道を取ったように思われる。すなわち、銅像の存在にあえて言及し、それらが誰の像か自分は知らないし、知っている人も少ないのだから、トラファルガー広場から移動してもよいのではないかと挑発的な発言をすることによって、像がそこに存在する意義を改めて考えさせるための一石を投じたのである。

案の定、リヴィングストン市長のこの発言に対して、メディアは一斉に反応した。市長の無知と無神経を指摘する声も多く寄せられた。ネイピア将軍 (Sir Charles James Napier, 1782-1853) は1839年から41年にかけてイングランド北部でチャーティストの運動が内乱へと展開するのを抑え込み、1841年から47年までインドでのイギリスの領土拡大の立役者であった (DNB, vol.14, 45-54)。ハヴェロック将軍 (Sir Henry Havelock, 1795-1857) は1857年にインドで激しくなってきたイギリス支配に対する反乱を鎮圧した功績を称えられた (DNB, vol.9, 174-179)。The

Dictionary of National Biography の 1917 年版は、彼らの行動を英雄的に描いている。『ガーディアン』紙によれば、これらの人物の銅像をトラファルガー広場から移動させることは「イギリスの歴史遺産を忘却にゆだねることになる」「我が国の遺産を首都の中心から消し去ることになる」といった反論が寄せられた (Kelso; Levenson, 219-220)。

リヴィングストン市長を攻撃する際に使われるのが “iconoclast” (伝統破壊主義者) という表現であるが、確かに市長の発言は、ロンドンの顔となった広場の姿に敬意を払わない軽率な発言のように聞こえる。だがそれは実は、上に挙げたような反応を招くよう仕組んだ計算ずくの発言だったのかもしれない。というのも、メディアで紹介された反論の多くが、帝国主義的な国家観に根ざした歴史遺産を思い描いていることを露呈しているからである。それはふたりの軍人を国民の英雄として祭り上げたヴィクトリア朝の歴史観をそのまま引きずっているのである。現在、多文化共生社会となったイギリスの首都の中心部に、ネイピアやハヴェロックのような、19 世紀半ばのインドでイギリスの支配確立のために戦った軍人を顕彰することの意味が改めて問われなければならない。このようにもリヴィングストン市長の発言は読める。19 世紀の帝国主義を発揚するイメージが、今日「全ての人のための広場」という広場観にふさわしいかどうかは、大いに議論の余地があるだろう。

すなわちトラファルガー広場が「全ての人のための広場」となるための変容を遂げるとは、車優先から歩行者優先の都市へのヴィジョンを意味するだけでなく、多文化共生社会ロンドンの姿を体現する広場への変容をも意味するのである。

2 銅像が生み出すイメージ

トラファルガー広場は国家と社会と芸術について、どのようなイメージを伝え得るのか。作家の想像力は、その可能性を広げてきた。ここでは 1920 年代にヴァージニア・ウルフが描いた広場と、1890 年にウィリアム・モリスが描いた広場を例に取ろう。

2-(1) 広場が誘発する帝国へのアンビヴァレンス

ヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』(*Mrs. Dalloway*, 1925) には 1920 年代半ばのロンドンの様々な場所への言及がある。トラファルガー広場も登場人物の目を通して描かれる。インドで長年、植民地経営の一端を担ってきた 53 歳のピーター・ウォルシュは、5 年ぶりに帰ってきたロンドンを新鮮な気持ちで歩く。トラファルガー広場に続くホワイトホール通りにさしかかった時、彼は若い兵士たちの行進に出会う。彼らの顔には一様に、「義務感、感謝、忠義、イングランドへの愛といった、銅像の台座に彫り付けてある碑文のような表情が張り付いている」ようにピーターには感じられる (Woolf, 57)。彼らとつい足並みを揃えて歩きながら、彼は一瞬、荘厳な気持ちにさせられる。トラファルガー広場に入ったピーターは、ネルソン、ゴードン (現在は広場にはない)、ハヴェロックといった偉大な軍人の堂々とした像に、心的距離を置きなが

らも感銘を受ける。特にゴードン將軍には少年時代に心酔したことを思い出す (Woolf, 58)。

ピーター・ウォルシュが植民地インドで仕事をしていること、彼がオクスフォード大学時代に社会主義に傾倒して放校処分を受けたことをすでに読者は知っているのも、ピーターの銅像に対する反応に、当時の知識人の屈折を読み取ることができる。社会主義の理念を信じていた若者が、大英帝国の植民地経営から生計を得る生き方、好戦的愛国心が生み出す抑圧を自覚しながら、愛国的心情を抱くというアンビヴァレンス、イギリスの知識人が抱えたこれらの自己矛盾を、ウルフはトラファルガー広場という象徴的な場所を使って描き出した。

2-(2) 変化のトポスとしての広場

また『ダロウェイ夫人』の主人公でロンドン社交界に生きるクラリッサ・ダロウェイも若い頃、友人に影響されて社会問題について議論したり社会主義思想の書物を借りて読んだりしたことがあった (Woolf, 38)。そんな本の代表としてウィリアム・モリスの名が挙げられる。19世紀後半のアーツ・アンド・クラフツ運動を推進したモリスは、40歳を過ぎてからは社会主義者として積極的な活動を展開した。作家活動では詩人として出発した彼は、社会変革のヴィジョンを語るエッセイやフィクションを世に問う作家となった。クラリッサ・ダロウェイが18歳の時に読んだとすれば、そんな本だっただろう。

彼の後期における代表作の一つに、浦島太郎的な物語の枠組みを使って、未来社会を主人公に夢見させる一種のユートピア物語がある。『ユートピアだより』(*News from Nowhere or An Epoch of Rest*, 1890) は、社会主義者の主人公が汚れきった1890年のロンドンから、同じ場所で目が覚めると21世紀の理想社会にいる、という設定だ。主人公は、19世紀後半のロンドンの非人間的な社会の有り様が、ことごとく生きる充実を感じさせる楽しく美しい有り様が変わっていることを発見する。街も人々も中世的な美を備えているあたりは、いかにもモリスらしい。大きな変化のひとつとしてトラファルガー広場も登場するので、それがどのように描かれているか見てみよう。

主人公は、案内を買って出た青年に連れられてロンドンを散歩するのだが、そのうち「いくぶん南側へ傾斜した開けた土地にやってきた。日の当たる場所には果樹園があって、アプリコットが植わっていた。その真ん中には彩色と金箔で飾られた茶店のような建物があった。果樹園の南側から伸びる長い道には、背の高い桃の古木の並木が陰を落としていた。道の先には議事堂の塔、すなわち肥やし市場があった」(Morris, 77)。トラファルガー広場が果樹園になり、ホワイト・ホールが桃の並木道となり、ビッグ・ベンのある国会議事堂が今では肥やし市場になっている、というのは支配階級を代表する場所を虚仮にするモリスの皮肉だ。この景観を見た主人公の脳裏に、彼が経験した広場の光景が去来する。

背の高い醜い建物に囲まれた広い場所、醜い教会が角に建ち、背後にはドームを載せた何の特徴もない醜い建物がある。車道には汗だくの、興奮した群衆があふれ、見物人たちを乗

せた乗合馬車が見下ろしている。中央には噴水のある舗装された広場があり、青い服を着た数人の男たちと、たくさんの奇妙に醜い銅像たち（そのうちの一つは高い柱の上に乗っている）の他は広場には誰もいなかった。この広場は車道の際まで青い服を着た頑強な男たちの4重に固めた列によって守られ、南側は騎馬隊のヘルメットが肌寒い11月の午後の灰色の中で白く冷たく光っていた。(Morris, 77)

ここでモリスは、1887年11月に、彼も実際に中心メンバーであったトラファルガー広場での大規模集会とデモ行進に対して、警察と軍隊が行った暴力的な鎮圧に言及している。貧困層による暴動への不安が中産階級市民の間で高まる中、すでに11月8日にロンドン警視庁長官から、トラファルガー広場での一切の集会も演説も禁止する通告が出されていた。「血の日曜日」と呼ばれるようになる11月13日、警察は広場に通じる道路を封鎖し、衝突に備えた。ロンドンの至る所から労働者や失業者からなる周到に組織された群衆が広場へと結集するためにデモ行進した(Mace, 179-195)。上の引用は、行進が攻撃される直前の瞬間を捉えている。ここでは広場に面するナショナル・ギャラリーも、セント・マーティンズ・イン・ザ・フィールド教会も、そして広場の銅像も、その醜さが強調されている。モリスの社会主義思想から見て、広場は人々が生活の中に見いだすべき美からほど遠いものだった。

トラファルガー広場は、モリスの生きた時代には政治集会の場所として頻繁に利用され、それが政府の悩みの種でもあった。『ユートピアだより』の第17章で、21世紀のロンドンに生きるハモンド老人が主人公に説明するには、1952年の内乱が、社会主義的ユートピア実現への第一歩だった。その内乱のきっかけとなったのが、トラファルガー広場での大集会に対して銃口が向けられて起こった大虐殺だった(Morris, 132-156)。これが『ユートピアだより』の中で最も長い第17章「いかにして変化は訪れたか」でモリスが読者に幻視させるトラファルガー広場の大虐殺、権力と人民が対峙する場であり変化を生み出す場としての広場である。

このようにモリスの広場も、ウルフの広場も、相反するイデオロギーがせめぎ合う場として捉えられているのが分かる。モリスの場合は市街戦という形で、ウルフの場合は一個人が抱えるアンビヴァレントな感情として表出されている。銅像や建物を立派と感じるか醜いと感じるかは、単に審美眼の違いだけではない。広場は思想の磁場なのである。

3 排他的な広場は反体制闘争のトポス

なぜモリスはトラファルガー広場を思想の磁場として物語の中心に据えたのか。それはモリスのフィクションが描くように、帝国の威容を象徴するために造られたトラファルガー広場が、当初から急進的な政治集会の場として使われてきたからである。フランス革命の後、イギリスでも革命が起こるかもしれないという恐怖は、支配階級にとって現実の恐怖であった。都市に流入する無産階級の群衆は革命への恐怖をおおる不気味な存在となっていた。内務大臣シドモス卿は

1818年、集会とデモ行進の実施を、厳しい条件を伴う許可制とする法律をつくって、事実上、労働者の集会を禁止した (Mace, 139-142)。トラファルガー広場が1844年に一応の完成を見て一般に開放された直後から、広場はあらゆる社会階層の人々が集う場となった。1848年のチャーティスト運動の集会では、トラファルガー広場とその周辺で破壊活動が行われたが、警察と軍隊によって鎮圧された。10年以上続いたチャーティスト運動はその後、求心力を失っていく (Mace, 139, 150-153)。しかし現在にいたるまで、トラファルガー広場は、権力と反体制活動のせめぎ合う場であり続けた。

なぜ政治集会はトラファルガー広場で開かれるのか。トラファルガー広場は、ウェストミンスターの政府と、西にある王宮 (王室の公式住居バッキンガム宮殿と対外的な公式王宮であるセント・ジェームズ宮殿) という、国家権力を代表する2つの場所に近く、それらと広い街路で結ばれた場所として構想された。19世紀の都市改造の一環で、広場と国会議事堂を結ぶホワイト・ホールは官庁街となった。広場とセント・ジェームズ宮殿を結ぶベル・メル街は、国会議員を初めとする紳士たちの社交クラブが立ち並んでいた。トラファルガー広場は、権力の座に距離的に近いがゆえに、示威運動の場として使われたのである。そもそもトラファルガー広場が造られたのは、帝国首都の「利便性、装飾性、健全性」(“Convenience, Ornament, Health”) (Mace, 36) を促進するのが目的だった。つまり周辺の道路を拡張し、重厚な建物や記念碑で飾るだけでなく、今や政府機関も上流階級の住居も集中している広場周辺からスラム街を一掃して、首都の「健全性」と見栄えをよくしようとする計画だった。その計画には、フランス革命で見せつけられた暴徒化した貧民群衆への恐怖がその底にあった。都市改造は対外的には帝国の秩序と威厳を視覚化するためのものであったが、ロンドン内部については、西部ウェスト・エンドを上流階級と中流階級のための地域として再開発し、ロンドンを階級的に分断する計画であった。愛国心をあおるトラファルガー広場を一般市民に開放することによって、全ての人のための広場という幻想を抱かせることができる。しかしメイスが指摘するように「トラファルガー広場は支配階級の言語を話す」のである (Mace, 17)。

世界の覇権を握ったイギリスは、繁栄の陰でかつてない格差社会となった。支配階級中心の首都の「健全性」のために広場周辺から排除されたはずの貧民が、1880年代になるとトラファルガー広場やその周辺に多数、夜露をしのぐようになった。メイスは「自分たちのまち」であるウェスト・エンドの「ヨーロッパでも最高に美しい景観を誇る広場が浮浪者のたまり場となっているのに警察は何もしない」ことを非難する警察への投書を紹介している (Mace, 171-172)。現実には貧民のたまり場と化したトラファルガー広場が、貧民を排除しようとする広場だったからこそ、労働者の人権を訴える集会はトラファルガー広場で行われた。そこに無産階級の人々が群れ集い、体制への不満を口にし、支配階級を敵視する言語を話す時、広場は当初意図されなかった意味を帯び、まさに相反するイデオロギーがせめぎ合う場となった。ディケンズが『二都物語』(A Tale of Two Cities, 1859) で、フランス革命の勃発時にパリのバステューユ監獄に押し寄せる群衆を何度も、逆巻き荒れ狂う大波に喩えた時 (“a whirlpool of boiling waters”, “the living sea”, “the

force of the ocean”, “billows”, “the raging flood”, “the sea of black and threatening waters”, “the ocean of faces”), 多くの中産階級読者にとって、その図は海を隔てた都市に起こった過去の出来事ではなく、現実に身近に起こりうる恐怖の図だったのである (Dickens, Ch. 21. 244-249)。集会とデモ行進に参加する労働者や失業者は、個人としての顔を持たない、制御の効かない一つの巨大な暴力的存在と見なされて、中産階級・上流階級にとって最大の脅威となった。

こうして「トラファルガーの戦い」は、イギリスがフランスに対する勝利を取めた後は、首都の広場においてヴィクトリア朝の富裕層と貧困層という「2つの国民」の間で戦われることとなった。それは富裕層にとっては、自分たちの街の中心で勃発する革命の脅威と見なされたのである。

その後20世紀に入って、集会の目的は女性参政権運動、アイルランド問題、反核運動、反戦運動と変化していったが、トラファルガー広場は反体制的な集会が警察や軍隊と衝突して排除される場所、というイメージが定着していった。

4 「第4台座プロジェクト」の意義

ここまで考察してきたように、その誕生以来、ロンドンの中心となったトラファルガー広場については、21世紀はじめのリヴィングストン市長の言を待つまでもなく、その意味付けが一定していたわけではなかった。流血の後、帝国の表象など跡形もなく果樹園に生まれ変わるという、モリスが描く過激なヴィジョンまでいかなくとも、帝国の象徴としての意味付けに居心地の悪さを感じる心情は19世紀からあった。帝国主義の表象であり抑圧と闘争の場である、というイメージを払拭する広場の改造を目指すのは21世紀に入ってからだ。その際、広場自体の改造と共に、広場を飾る銅像についても変化が訪れることになった。ここではそのプロジェクトの意味について考える。

前述したように、トラファルガー広場の四隅には、4つの銅像の台座がある。南の隅はネイピア、ハヴェロックという19世紀半ばに植民地で活躍した軍人の像が占めている。北東の台座にはジョージ4世の騎馬像があり、それに合わせて北西の台座にはウィリアム4世（在位1830-1837）の騎馬像が載るはずだったが、ロンドンの記念碑建立計画につきものの費用の問題で実現しなかった (Hood, 124)。これが第4の台座と呼ばれるようになったのだが、ここに20世紀末まで誰も載らなかったというのも面白い。台座を空けたままにしておくほうが格好悪いと考えられて、即座に誰かの銅像を置いてしまいそうなものだと思うが、そこは議論を重ねて、様々な権威筋が文句をつけて事を運ぶイギリスのことだ。ネルソン記念柱の例でも明らかのように、銅像一つ建てるだけでも、誰の像であるべきか、その像をどこに建てるのがふさわしいか、資金はどうやって調達するか、誰に創らせるか、などなどについての議論が二転三転するのが常であった。おかげで第4の台座は空いたままになって、広場の新たなイメージ創出の一役を担うことになる。

銅像とは多くの場合、死者を顕彰するために建てられる。トラファルガー広場は、トラファルガーの海戦で戦死したネルソンを載せた記念柱をはじめ、過去の軍事的英雄の像で満たされてき

た。19世紀の重々しい栄光の過去が、冷たい石とブロンズに閉じこめられる。それらの像が広場に威厳を与えているのは確かだ。しかし帝国主義的な過去の栄光に満ちた空間に変化を起こそうとするプロジェクトが、広場の構造上の改造とほぼ同時にスタートした。

第4の台座に誰を載せるか、という問題は長い間答えの出ない問題であった。戦後になって大英帝国の過去を顕彰することに抵抗を感じる人々が増えた時代に、軍人像を載せることに一般市民の賛同を得ることは難しくなっていた。そして時代の変化に耐えて人々の共感を得る人物を選ぶことの困難さが意識されるようになった(Hood, 124)。これは19世紀に好戦的愛国主義に煽られた国民感情が英雄に祭り上げた軍人像の建立という事態より、それこそずっと「健全な」状態だろう。人物を選ぶことの困難さを意識するというのは、多文化共生社会を標榜するイギリスで、異なる文化的・宗教的背景を持った人々の全てに配慮し、銅像にするにふさわしいと大方に納得される人物を選ばなければならない、ということ意識しているからだ。そうすると、19世紀の英雄像のように他国や他民族を制圧したことを顕彰するのは、もはや無知と無神経のなせる業と見なされ得る。ネイピアとハヴェロックが誰か知らないと言い放ったりヴィングストーン市長に向けられた「無知・無神経」という非難は、そのまま非難した側に返されるのである。

その困難から、新たに面白い試みが生まれた。王や軍人を顕彰するために造られた台座をアート・スペースとして使うアイデアである²⁾。1999年7月の“Ecce Homo”を皮切りに【写真4】、これまで幾つかの彫刻作品が数ヶ月単位で台座に載せられたが、そのうちの一つは、2000年にお目見えしたビル・ウッドロウの「歴史に関わらず」(“Regardless of History” by Bill Woodrow)【写真5】という、巨大な枯れ木がその根を人間の頭部と1冊の大部な本に絡みつかせているブロンズ彫刻だった(Hood, 125)。国王や英雄の像が企図された台座に設置されたこの作品は、歴史から学ばず崩壊する文明を視覚化することによって、トラファルガー広場が表象する勝利者としての大英帝国の歴史に対する批判的な視点を提供する。レイチェル・ホワイトレッドの作品「記念碑」(“Monument”, by Rachel Whiteread)【写真6】は、第4の台座の上に透明の亚克力樹脂で倒立した台座を置いた形になっている。この作品も見る者に、トラファルガー広場に銅像を建立することの意味を問い掛ける作品だ。

また2003年のマーク・クインによる「アリソン・ラパー 妊娠8ヶ月」(“Alison Lapper 8 Months Pregnant” by Marc Quinn)【写真7・8】は、多くのイギリス人がその像のモデルを知っている。アーティストとして精力的活動を続ける現代の女性で、四肢を欠いた肉体の持ち主であるアリソン・ラパーの姿を、メディアを通じて知っているから、彼女として認識できる。その真っ白い裸体の妊婦像は圧倒的な存在感で、広場の国王や軍人の古色を帯びたブロンズ像と好対照をなした。

この像については、好悪両方の反応がメディアを賑わした。これもまた見る者に、広場に建つ銅像の意味を改めて問いかけてくる像だ。というのも、ロンドンの公共スペースに建つ銅像は、圧倒的に男性像であり、わずかにクリミア戦争で活躍した看護師フローレンス・ナイチンゲールの像と、第1次大戦でドイツ軍に銃殺された看護師イーディス・キャヴェルの像が広場の近くに

建てられているにすぎない (Mace, 11)。このように広場が男性像ばかりで占められてきたことの意味をアリソン・ラパー像は問いかけてくるのだ。

アリソン・ラパー像が持つ意義はそれだけではない。銅像とは死者を顕彰するものだ。この点でこれは銅像ではない。しかもこの新たな命を宿した女性像は生命感にあふれている。死者の像が凝固した過去のイメージを強調するのに対して、この像は開かれた現在と未来を志向する。これはトラファルガー広場の改造プロジェクトと軌を一にする志向性だ。

その後も第4台座には話題が集まり、多くの人々の関心を呼んでいる。第4台座プロジェクトは、このように単なる現代アートの展示スペース以上の影響力を発揮したと評価できる。これはトラファルガー広場を帝国主義的なイメージから解き放つ新たなイメージを発信する可能性を持ったプロジェクトだと言えるだろう。

結語

19世紀以来、トラファルガー広場は抗議の場としてだけでなく、記念行事の場としても使われてきた。戦勝記念、国王戴冠式など、国中をあげて祝う行事を華やかに演出できる空間でもあった。人々が集まること自体が忌避されたわけではなかったのである。リヴィングストン市長は広場改造事業完成のスピーチで、広場を「祝祭と抗議の場としての歴史に富んだ場所」と捉えたが、同時に「1945年のヨーロッパ戦勝記念日から2001年のネルソン・マンデラ氏を迎えて開催した南アフリカ解放記念日コンサートまで多くの思い出深いイベントの場所」と捉えることによって戦後の祝祭的大集会を想起させ、広場が抑圧からの解放の喜びを分かち合う場所であることを強調した。これは広場を栄光の過去が静止した場所としてではなく、今を生きる人々が集い交わる場所として意味付けているのだと言える。この広場改造事業が、広場が表象してきたイギリスの世界覇権と植民地支配という帝国主義的なイメージからの転換を企図していることが窺える。

今日のイギリスが多文化共生社会として機能するためには、群衆よりも孤立と分断の方をこそ恐れなければならない。リヴィングストン市長は、トラファルガー広場の改造の意図について「心地よい、優れたデザインの空間は、都市をより安全で、人々が結びついた、楽しめる場所にしてくれる」と語った³⁾。

2005年7月7日にロンドンで同時多発爆破事件が起きた。1週間後の追悼集会は市の主導で、トラファルガー広場で行われた。その後、リヴィングストン市長は「7百万人のロンドン市民、一つのロンドン」(“Seven Million Londoners, One London”)という標語を掲げ、差別や分断をなくし多文化協調を推進するキャンペーンを行った。一年後のロンドンを筆者が訪れた時には、街角のいたるところに“We are LondONERs”の幟がはためいているのが印象的だった。これは当然のことながら、単にたとえば「私たちは京都市民です」というのと同じではない。文化や宗教の違いを超えて、ロンドンに共に生きる者としてのアイデンティティを自覚して誇りを持つ、

ひとつになろう、という協調と連帯を呼びかける標語だ。2005年のキャンペーンの成功を受けて2006年に展開された“*We Are Londoners, We Are One*”キャンペーンの一環だった【写真9】⁴⁾。

ここまで広場改造の理念的根拠について考察したが、同時にこの改造は、リヴィングストン市長の「毎年ここを訪れる何百万人という人々により素晴らしい経験をしてもらえるようにした我々の事業を誇りに思います」というスピーチも示すように、観光戦略でもある。ノーマン・フォスターというイギリスの著名な建築家を起用して、トラファルガー広場とその北に位置するナショナル・ギャラリーという2つの観光名所をつなぎ、新たにエレベーターやカフェなども設置して心地よい空間を創出することによって、首都の顔のフェイス・リフトを行ったのは、観光客を新たに引きつけるための投資でもあった。90年代から長く続いた好景気に後押しされての事業だったが、観光資源としての歴史ある広場に、現代性を共存させる改造を公共事業として行ったロンドンの取り組みは、みやこの新たなイメージ創出のモデルとすることができるだろう【写真10】。現在、市長が交代しても、第4台座のアートをはじめ、広場は話題を提供し続けている。

しかし賑やかなイベントを次々と打ち出すトラファルガー広場は、現在もさまざまな集団の政治集会の場でもあり、警察とのにらみ合いの場でもある。トラファルガー広場改造事業の謳い文句が「全ての人のための広場」であったということは、「全ての人のため」とは言えなかった広場の歴史的経緯を踏まえば、かように様々な含意を伴うイメージの創出を意味していたのであり、現在も思想の磁場であることに変わりはない。

註

この論文は平成18年度科学研究費補助金基盤研究(C)に採択された「京都とヨーロッパ主要首都のイメージの生成・受容・流布・変容に関する比較文化研究」(課題番号:18600007, 研究代表者:野口祐子, 平成18年度~平成20年度)の研究成果の一環として発表するものである。

* 英語文献からの日本語訳は全て拙訳である。

1) “2004 Royal Institute of British Architects award for Building in an Historic Context”.

2) 第4台座の作品の画像は、以下のURLからのものである。

【写真4】“*Ecce Homo*” by Mark Wallinger

http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/745962.stm

【写真5】“*Regardless of History*” by Bill Woodrow

http://www.bbc.co.uk/london/travel/features/trafalgar_square/slideshow/17.html

【写真6】“*Monument*” by Rachel Whiteread

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/entertainment/1359423.stm>

【写真7】“*Alison Lapper 8 Months Pregnant*” by Marc Quinn

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/programmes/breakfast/4692986.stm>

3) http://www.bbc.co.uk/london/travel/features/trafalgar_square/politics.shtml

4) <http://www.london.gov.uk/onelondon/>

引用文献

- Dickens, Charles. *A Tale of Two Cities*. 1859. London: Penguin Books, 1985.
- Hood, Jane. *Trafalgar Square: A Visual History of London's Landmark through Time*. London: B T Batsford, 2005.
- Kelso, Paul. "Mayor Attacks Generals in Battle of Trafalgar Square." *The Guardian*. Friday October 20, 2000.
<http://www.guardian.co.uk/uk/2000/oct/20/london.politicalnews>
- Levenson, Michael. "London 2000: The Millennial Imagination in a City of Monuments" in Pamela K. Gilbert ed. *Imagined Londons*. Albany: State University of New York Press, 2002. Ch. 12; 219-239.
- Mace, Rodney. *Trafalgar Square: Emblem of Empire*. London: Lawrence and Wishart, 2005.
- Morris, William. *News from Nowhere and Other Writings*. London: Penguin Books, 1993.
- wikipedia* ("Livingstone" の項) http://en.wikipedia.org/wiki/Ken_Livingstone
- Stephen, Leslie and Sidney Lee eds. *The Dictionary of National Biography*. Vol. 9; Vol. 14. London: Oxford University Press. 1917.
- Woolf, Virginia. *Mrs. Dalloway*. 1925. London: Hogarth Press, 1947.
- 蛭川久康他編著『ロンドン事典』大修館書店, 2002.

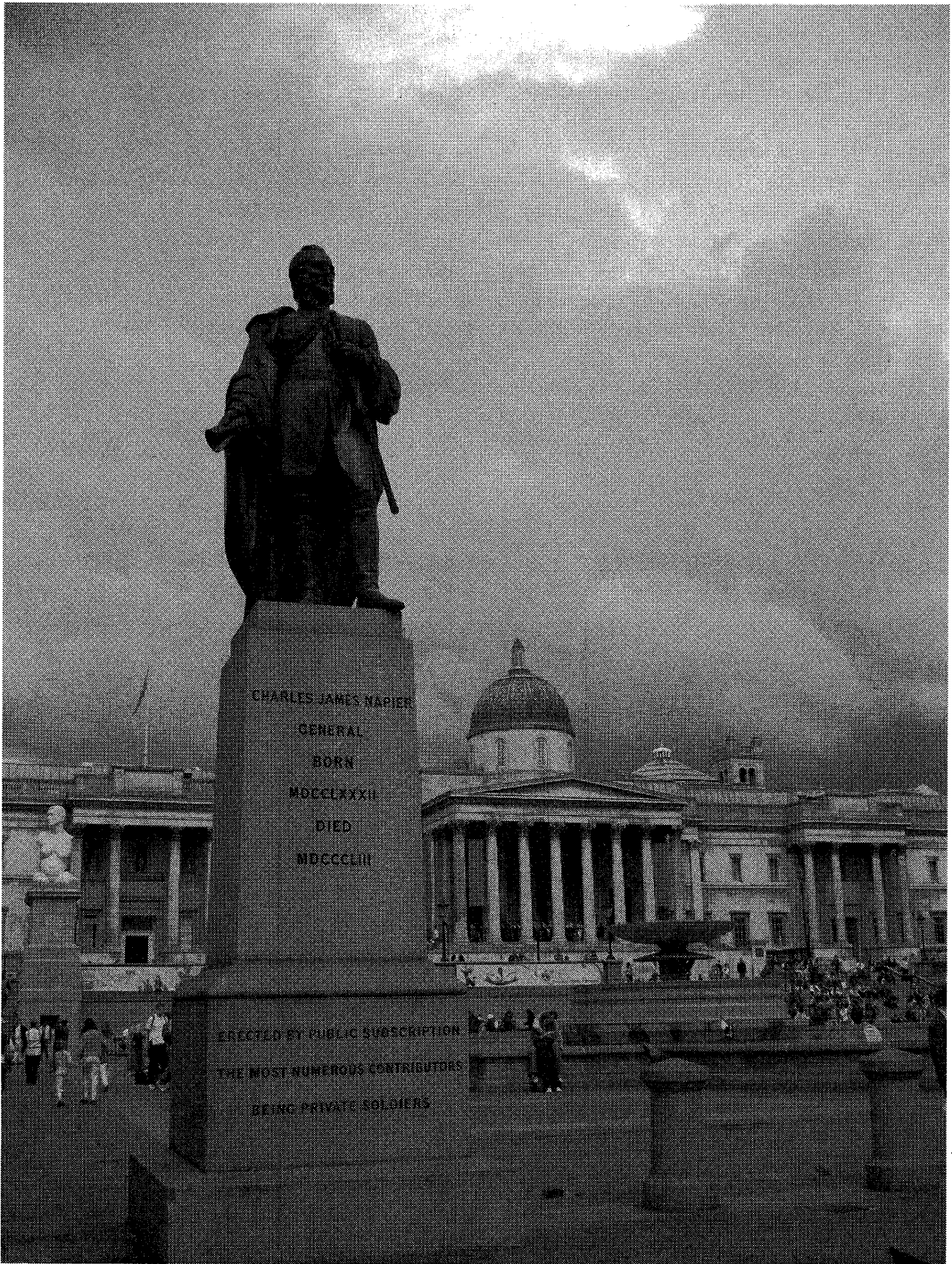
(2008年10月1日受理)

(のぐち ゆうこ 文学部教授)

【写真1】 トラファルガー広場南方からネルソン記念柱を見る。右手前方はチャールズ1世騎馬像、背後の建物はナショナル・ギャラリー。 2006年8月、筆者写す。



【写真2】 広場南西からネイピア將軍像を見る。背後にナショナル・ギャラリーと「アリソン・ラパー妊娠8ヶ月」像が見える。 2006年8月、筆者写す。

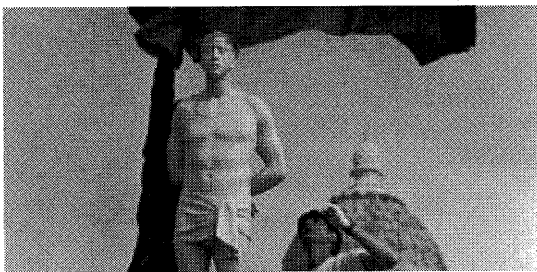


誰のための広場か？

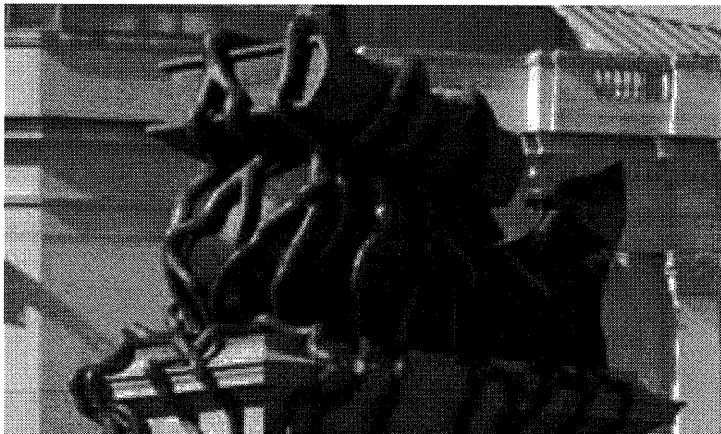
【写真3】 広場南東からハヴェロック少将像を見る（手前）、背後の騎馬像はジョージ4世像。
2006年8月、筆者写す。



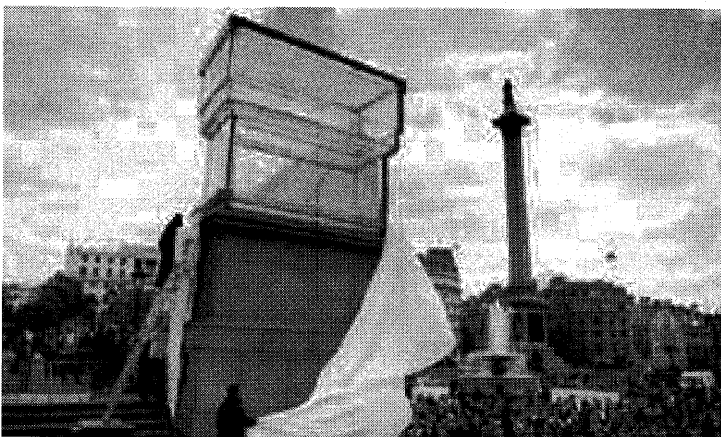
【写真4】 “Ecce Homo” by Mark Wallinger
(除幕式で)



【写真5】“Regardless of History” by Bill Woodrow



【写真6】“Monument” by Rachel Whiteread (除幕式で)



【写真7】“Alison Lapper 8 Months Pregnant” by Marc Quinn



【写真 8】 トラファルガー広場北西から南方を見る。手前に「アリソン・ラパー妊娠 8 ヶ月」像。重なって後方にネルソン記念柱と、新しい観光名所となった観覧車ロンドン・アイが見える。
2006 年 8 月，筆者写す。



【写真 9】 2005 年 “Seven Million Londoners, One London” のキャンペーン用バナー



【写真 10】 子供たちのためのイベントを準備中のトラファルガー広場。左に見えるのは「アリソン・ラパー妊娠8ヶ月」像。2006年8月，筆者写す。

